

平成31年1月28日
さいたま市立芝川小学校

○学校評価を受けて

- ・ここ数年、高止まりしている。
その中でも、非常に学校がよくなっているを感じる。
- ・子どもは短時間で色々と経験する。
近年話題になっている「非認知能力」（聞く態度、諦めない力など）は、そうした経験の中に入っている。

○子どもへの要求と大人のあり方

- ・緊張して発表ができない子がいるが、大人も皆発表ができるわけではない。
自らができないことを子どもに求めるのは正しいのか。
- ・社会がそうさせているのかもしれない。
- ・ニュースなどでは、大人が変なことをして手本になっていない。
- ・家庭学習について、宿題が多いと感じる親もいれば、少ないと感じる親もあり、そもそも宿題をしない家庭もある。
宿題はきちんとやらせるようにしたい。

○あいさつ

- ・下校時のあいさつ指導は、誰がするべきなのか。
あいさつの指導は学校だけでなく、家庭でもするべきなのでは。
- ・ヨーロッパでは人々は100%あいさつをする。
それは、様々な人種が共に暮らす中で、「不審者じゃない」「敵意がない」ということを常に示し続ける必要があるから。
- ・日本は、共同体意識が強く、よそ者と身内を区別する意識が強い。
風土的にあいさつを100%求めるのは難しい。

○下校トラブルについて

- ・先生が解決してくれると考えている保護者が多いのでは。
- ・門を出たら家庭の問題なのではないか。
- ・通学班を失くし、一人で登校している地域もある。

○保護者からの要望

- ・全国的に、保護者から学校への要望が多くなっている。具体的にどちらが何に責任をもつか、線引きをする時がきている。

- ・教育との関わりが薄い保護者が、学校に不満をぶつけてしまうと聞く。
子どもよりも熱くなってしまう場合もあるとか。
- ・まずは、学校に興味をもってほしい。そのためには、保護者が学校と関わる接点を増やすことが必要だと思う。
- ・学校は、保護者と敵対する関係ではないこと、共に子どものために協力する存在であることを説明し続けていくしかない。

○PTAの立ち位置

- ・PTAは、保護者からの希望を吸い上げ、学校と連携していく場所。
- ・他校PTAでは、「だれがやってくれるのか」という要求があがってきている。
PTAは保護者と同じ立場であるという意識、保護者同士が協力して運営しているという意識が不足しているのではないか。
- ・PTAは学校の協力者であり、支援者。
保護者一人ひとりが当事者意識をもつことが重要である。
今後も教師と保護者のパイプ役としてがんばっていききたい。

○保護者が孤立することへの懸念

- ・近所付き合いが減っているので、保護者が自らコミュニティを開拓しなければいけない時代になった。
どこに聞けばよいのかが分からず、担任に職分を超えた相談が持ち込まれることもある。
ただし、学校は学校教育以外の内容に深入りできない。
そこで、スクール・カウンセラー、さわやか相談員、スクール・ソーシャルワーカー等をもっと活用するのがいいだろう。学校以外にもよい相談機関がある。
- ・自治会では、地域と交流がない家との接し方が難しい。
自治会に入らないと情報が入らないから、相談も受けられない。

○芝川小学校45周年を迎えて

- ・芝川小学校は、片柳小学校まで子どもを通わせていた地域の人々の「ここに学校をつくってほしい」という願いをもとに作られた。
- ・私たちは、ここに学校があることに感謝すべきだろう。
- ・教員が多忙になり、家庭訪問や地域への参加が希薄になる恐れがある。学校と地域とのつながりを広げ、互いに支え合える関係であり続けていきたい。

文責：小松